

## はじめに

中世道路研究のピークは、一九九〇年代後半～二〇〇〇年代にあつたように思われる。中心となつたのは、藤原良章氏が主催されていた「中世みちの研究会」(「みち研」)で、毎年研究会を開催するとともに数々の研究書を世に問われていた。もちろんそれ以前にも交通史研究はあつたし、戸田芳実氏に代表される古道研究もあつたが、「みち研」は、考古学と文献史学とが連携し、具体的・即物的に中世の道とそれにまつわる施設や人々の姿を浮かび上がらせており、従来の研究とは一線を画していた。背景には、下古館遺跡(栃木県下野市)、芳野遺跡(福島県白河市)、荒井猫田遺跡(同郡山市)、王ノ壇遺跡(宮城県仙台市)、南小泉遺跡(同)などの調査によつて、中世道路遺構が次々と地中から姿を現したことがあつた。しかし、いつしか「みち研」も開かれなくなり、発掘調査も一段落して、中世道路研究の高揚も沈静化していった。

以上は東北に住む者の実感であるが、関東の状況は違つていたようである。関東各地に名を残す鎌倉街道に関心が集まり、発掘調査成果も蓄積されていたのである(たとえば高橋修・宇留野主税編『鎌倉街道中道・下道』高志書院、二〇一七年)。その活況を受けて、二〇一九年四月末から六月中旬にかけて栃木県立博物館で企画展「下野の鎌倉街道―道を行き交う人と物―」が開催され、その期間中の五月二六日にはシンポジウム「中世の鎌倉街道「奥大道」も行われた。

このシンポジウムの焦点が関東に合わされていたため、道が続いて行く先、とくに奥大道(おくだいどう)の白河以

北、すなわち陸奥国の範囲についても新たな研究の展開が求められた。そうして開催されたのが、奥大道シンポジウム Part 2 「中世奥羽の街道と大道」（於東北学院大学。東北学院大学中世史研究会主催、栃木県立博物館・東北中世史研究会・科学研究費補助金基盤研究 B 「東北太平洋沿岸地域の歴史学・考古学的総合研究」 共催）である。関東での研究の高まりに東北地方の研究者が応え、結果、奥大道の全体を議論の俎上に載せる仕儀となつたわけである。

本書は、この二つのシンポジウムでの報告を基礎としている。ただし、最初のシンポジウムを企画した時点以降、認識の深まりがあつたので、それについて述べておく。

栃木県立博物館の企画展の名称が「下野の鎌倉街道」であつたように、当初は鎌倉街道が前面に出、奥大道は脇役的存在であつた。しかし、岡陽一郎氏に代表される研究によつて、鎌倉街道が中世道路を分析する素材たりうるのか疑問符が付くこととなつた。また、奥大道についても青木文彦氏らによつて、研究者によるとらえ方に揺れがあることが指摘されるようになった。

このことに関して、二つのシンポジウムを通じての到達点は以下である。

奥大道は、鎌倉から陸奥外浜までを結ぶ関東・陸奥縦貫道であり、本来その名称は鎌倉を出発して陸奥に到る道という観点で付けられている。一方、奥大道の別称が「鎌倉街道中道(路)」とされることがあるが、鎌倉街道は多分に近世以降の歴史認識が反映した名称であり、「中道(路)」も固有名詞ではなく、軍勢が三手に分かれて進んだ場合の中央経路を示す相対的な名称に過ぎない。

本書はこの到達点を踏まえて編まれている。詳しくは、江田論文、岡論文、入間田論文を参照されたい。なお、考古学的調査によつて発掘された道路遺構が奥大道かどうかを確定することは困難である。本書の考古学研究者による論考では、様々な状況証拠から奥大道の可能性が高い道路跡を「奥大道」と称している。また、起点としての鎌倉の成立なくして奥大道は存在し得ない。しかし、それ以前の平泉藤原氏時代に白河関外浜の街道の整備がなされてい

た。この道路は奥大道の前身となるものと考え、「原奥大道」と呼ぶこととした(東山道の延長で、一方の起点は京都)。

以下、本書に収められた論考について簡単に紹介する。二部構成として、関東に関する論考を第I部、陸奥(二部出羽)に関するものを第II部におさめた。前者は栃木県博のシンポジウム報告、後者は東北学院大学でのそれを基にしている。ただし、両シンポジウムの報告を網羅してはいるわけではないし、内容も必ずしも当日と同じではない。シンポジウム報告者以外から寄せていただいた論考もある(高橋論文・入間田論文)。また各部とも総論(江田論文・岡論文)を最初に置き、概ね鎌倉から北(中世の方位感では東)へ奥大道をたどるように論考を配列した。入間田論文は、両シンポジウムに対するコメントの要素を持つので最後に置いている。

もとより細部まで論者の見解が一致しているわけではないが、本書によって、奥大道の再定義がなされ、その全体像について現時点での最大限の成果が提示できているとすれば幸いである。

## 第I部 関東の奥大道

江田郁夫「奥大道とは何か」は、中世全般にわたり、史料に現れる関東と奥州を結ぶ道の呼称について検討し、鎌倉と奥州を結んだ主要街道の正式名称が「奥大道」で、戦国期に至るまで「奥道」「奥通」と称されていたことを明らかにする。その上で、東国における鎌倉の位置づけ、江戸の台頭などによる街道のあり方の変化についても考察する。

高橋慎一郎「鎌倉と奥大道」は、鎌倉の化粧坂が、陸奥・武蔵を経て奥大道が鎌倉へ入る際の「正面玄関」であり、夜道を照らす灯籠堂や卒塔婆が建立されるなど、幕府によって整備・荘厳されていたとする。また、卒塔婆には平泉文化の影響があるとする。

青木文彦「武蔵の奥大道」は、建長八年(一二五六)六月二日のいわゆる奥大道警固令の受命者(宛所)の名字の地を

必ずしも警固対象地すなわち奥大道通過地とすることはできないという前提で、武蔵国内が警固対象地と目される六名の地頭について再検討する。奥大道の経路についても検討し、複路が存在した可能性を指摘するとともに、武蔵国では、奥大道沿いの主要な渡河点の宿のみを警固の対象としていたと指摘する。

鈴木一男「下野小山の奥大道」は、中世道路遺構が多数検出されている栃木県小山市の遺跡についての考察。奥大道と推定される道路遺構の様態、規模、舗装の状況について報告し、ルート選定に思川水運を考慮していることを指摘する。その上で、奥大道沿いに営まれたと考えられる二つの集落について検討し、一つを町場的集落、一つを水陸交通の結節点に設けられた集落と位置付け、かかる集落の連なりが小山氏の経済的基盤となっていたとする。

大澤伸啓「奥大道関連遺跡・下古館遺跡」は、下古館遺跡を奥大道沿いの宿跡と評価した上で、経路上の前後に子宿をもっていたこと、遺構のグループピングが可能で、それぞれが座や地域権力・寺社と関係をもつ集団の所有・管理するエリアであり、個人所有とそれを反映した短冊形地割を特徴とする近世の宿とは段階を異にすること、十四世紀に奥大道が付け替えられることによって、下古館遺跡の機能が金井宿に移転したことを述べる。

## 第II部 陸奥の奥大道

岡陽一郎「鎌倉幕府と幹線道路―「かまくらかいどう」中道(路)・奥大道を中心に―」は、奥大道を、鎌倉と陸奥国を結ぶ幹線道路で、その名称が鎌倉幕府周辺の人々が使い始めた一種の行政用語であったとする。その上で、鎌倉街道を、江戸時代以降の幹線道路像や幕府像が投影された産物と喝破し、奥大道と鎌倉街道中道(路)との同一視に疑問を呈する。さらに、鎌倉幕府の道路行政への関与は限定的であり、従来の中世史研究において、幕府をあまりに強大なものとして評価してきたのではないかと警鐘を鳴らす。

鈴木一寿「陸奥白河の奥大道」は、芳野遺跡について三期にわたる遺跡の変遷を詳述し、検出された道路遺構を中